

研究ノート：小山内薫の宗教信仰とその時代

熊谷 知子

要旨

小山内薫(1881～1928)はその生涯において、キリスト教のほか、巢鴨の至誠殿や大本教といった新興宗教にも接した。小山内の著作に関しては、これまで二つの全集が出版されているが、巢鴨の至誠殿や大本教といった、いわゆる「邪教」信仰に関する著作は、「新劇の父」たるイメージにそぐわないためか収録されていない。それに加えて、小山内に関する伝記や回想において、彼の宗教信仰は「弱さ」や「矛盾」を体現するものとして紹介されてきた。

しかし、随筆「大川端」時代(『女性』1924年4月号)における小山内自身による告白をみれば、彼にとって宗教信仰は、「矛盾した生活」における「ネセシチイ」なものであることは明らかであり、看過することはできない。

なお、小山内は生涯一つの宗教に徹することはなかったが、その著作の中で繰り返し「靈魂」や「魂」という言葉を用いたことから、心靈主義的傾向と言うべき性向を一貫して持っていたと思われる。小山内と同じくラフカディオ・ハーンのもとで学んだ英文学者で、後に心靈学に傾倒した浅野和三郎が一時期大本教の幹部であったように、大正時代において心靈主義は新興宗教と近い領域にあり、欧米の怪奇小説の受容をも含めて多面的に考察する余地がある。

そこで、今回は小山内における宗教信仰と心靈主義的傾向を、大正という時代背景のなかで整理することを試みた。本稿は、小山内のその傾向が創作活動にいかに関与したか、という問題を論じる上での予稿である。

キーワード：小山内薫　心靈主義　宗教信仰

はじめに

今日、小山内薫(1881～1928)といえば、自由劇場や築地小劇場といった「新劇」を中心に語られることが多い。このことについては、小山内薫の二つの全集『小山内薫全集』(全8巻、春陽堂、1929-1932年)と『小山内薫演劇論全集』(全5巻、菅井幸雄編、未来社、1964-1968年)のもたらした影響が少なくない。これらの全集はもちろん、小山内薫の30年弱の創作活動、執筆活動を網羅したものではなく、「新劇の父」たる小山内薫像に即さないものは排除されているように見受けられる。

その排除された側面の一つに、小山内の新興宗教信仰に関する言論がある。宗教といっても、キリスト教に関するものは一部収録されているが、「巢鴨の至誠殿」や「大本教」といった、いわゆる「邪教」に関するものは、「新劇の父」たるイメージにそぐわないためか、除外されてしまっているのである。それに加えて、小山内に関する伝記や回想には、彼の宗教信仰は「弱さ」や「矛盾」を体現するものとして紹介されることが多い。

しかし、近年、笹山敬輔著『演技術の日本近代』(森話社、2012年)によって、小山内の新興宗教への接近と演技論との関係が検証されたことで、小山内が生涯よく用いた「靈魂」や「魂」といった概念とともに、彼の宗教信仰の意義が見直されるようになったと言える。また、全集に収録されていない随筆「大川端」時代(『女性』1924年4月)における小山内自身による告白を見れば、彼にとって宗教信仰は、「矛盾した生活」における「ネセシチイ」なものであることは明らかであり、見過ごすことはできない。そこで、本稿では、大正時代に流行した「心靈主義」をキーワードに、小山内における宗教信仰を大正という時代の背景とともに整理し、彼の創作活動にどう反映されたかを考えるうえでの足掛かりとしたい。

1. 小山内薫の宗教信仰

まず、小山内薫がその生涯において、どのような宗教に接してきたかということを確認しておきたい。このことについては、以下の山田肇の記述が適当なものであると思われる。

周知の如く彼は青年時代内村鑑三の門に入り、一時はすこぶる傾倒するのだが、数年ならずして師に背き、その後結婚するや、小山内の家庭には天理教の祭壇が設けられる。これは細君の信仰によるものだ、彼自身は必ずしも信者ではなかったようであるが、しかし数年すると小山内は巢鴨の至誠殿とかいう大黒天を祀る巫女の許に通い始め、怪しげな至誠殿の踊りなるものをまるで夢遊病者のようになって踊ったりまでして憚らない。やがて今度は大本教に凝るようになり、殊に一度綾部の本山を訪れてからは一層狂信の度を強め、周囲の忠告も一向に聴き入れなかったということである。このように彼がしきりに邪教に凝ったのは大体大正中期のことで、その頃は細君が幻影におびえたり、怪しい魚屋から買った貝で家内中が中毒を起したりしたとかいうので引越し、子供たちが次々に病気をするのを家相の祟りだといはれたとかでまた引越すというようなありさまであって、小山内は殊に迷信深くなっていったものらしいが、しかし少なくとも「心靈主義的」傾向と呼ばれるようなものはその後も影を潜めず、彼の最後までこれはついに跡を絶つに至らなかった様子である。¹

このように、小山内は生涯一つの宗教に徹することではなく、キリスト教のほか、「巢鴨の至誠殿」と「大本教」という新興宗教に接した。キリスト教に入ったのは一高の学生であった明治33年（1900）頃で、巢鴨の至誠殿には大正5年（1916）頃から通っていたと思われるが、これは「新劇場」という新劇運動を行っていた時期と重なる。そして、大本教には大正9年（1920）頃、「松竹キネマ研究所」で映画製作に携わっていた時期に接近した。なお、小山内自身は天理教徒ではなかったようだが、妻の登女子は熱心な天理教徒であったという。

ここで重要になるのが、山田の言う小山内の「心霊主義的」傾向である。いずれの宗教も数年足らずで離れた小山内であるが、生涯を貫いていたものがこの「心霊主義的」傾向であったのではないかと思われるからである。そもそも、大正時代において、新興宗教と心霊主義の関係が深いものであったことは、一時期大本教の幹部であった浅野和三郎の著作などを見れば明らかである。このことについては、後に改めて触れたい。

キリスト教や大本教はよく知られているが、「巢鴨の至誠殿」という新興宗教に関しては今日ではあまり知られていないと思われるため、ここで当時の新聞記事を引用したい。

一寸垢抜けのした女当人は口を緘して前身の秘密を語らないが、何れは水商売をして来たそれしやの果らしい 当人の話に依ると二三年前の一夜神託があつて東海道の或る田舎から捜し出して来たといふ大黒天の像を座敷内の神殿に祀って、至誠殿と名付けてゐる 鶴子は日夜其礼拝に余念なく、気が向かねば一間に引籠ったきりで幾日も夫にさへ顔を合わせないのが如何にして神通力を得たものか、それからといふもの透視もすれば璧も癒す、一寸した病人を癒した話などは腐る程あるらしい 此神様の弟子三千人とは話半分に聞いても大した者だが、周囲に四五人の使途のやうな高弟があつて、其下ツ葉の弟子連の中には小山内薫、生田長江、沼波瓊音、栗原古城、広瀬哲士、阿部秀助、山田耕作、諸口十九などの人々がある いづれも神様を礼拝する時は感極まって踊り出す、其姿の珍妙な事は話にならない 岡田三郎助君も此程小山内君に勧められて神様を拝みに行き聾を癒して貰つたといふ²

ここで名が挙がっている、生田、沼波、栗原、広瀬、阿部は皆、小山内と同年代で、同じく東京帝国大出身者である。山田耕作（後の「耕筈」）と諸口十九は、大正5年（1916）当時、小山内と「新劇場」の活動を共にしており、至誠殿にも共に通っていたという。そして、画家の岡田三郎助の妻、岡田八千代は小山内の実の妹である。このように、巢鴨の至誠殿は、当時のインテリ層や知識人を多く集める新興宗教であったのである。

小山内の巢鴨の至誠殿信仰における態度は、次のようなエピソードで知られている。まずは、「新劇場」のメンバーであった石井漠による証言から、息子の石井歡が記したものである。

小山内薫が漠を連れて至誠殿へお参りに行ったことがあるが、その夜は曇っていたので、小山内薫は神様の亭主に「こんな曇った晩でも、神様のお力で月様が拝めますか」と聞いた。すると亭主は「もちろんです。頼んでみましょう」と言って奥へ消えた。しばらく経つと雲が流れ、月の光が射してきた。このとき亭主が奥から駆け出し

てきて、「ほらご覧なさい。いま祈願をしているんです」と得意そうに告げた。信心のない漢は、後で「あれはただの偶然ですよ」と言って小山内薫に叱られた。³

次いで、戸板康二によって語り継がれる小山内の信仰の様子からも、彼がいかに巢鴨の至誠殿に熱中していたかということが伺える。

ある日、森元の家へ、妹の岡田八千代が訪ねて行くと、「巢鴨の神様に教はった秘法なんだよ」といって、突然手を合せて拝みはじめた。そして神が憑いたやうになり、その日その時刻に、知人がどんな形で何をしてゐるかといふ姿を、次々にあらはして見せた。当時大阪に行つてゐる喜多村緑郎だの、吉井勇だの、久保田万太郎だのが出て来た。(喜多村は、あぐらをかいて本をよんでゐた) そっくり、その人になってゐるやうだったが、目がさめて、彼は何も知らないといふのだった。⁴

このように、キリスト教からいわゆる「邪教」へと移つていった小山内だが、彼にとって宗教とは何だったのか、ということを考えるとき、大きな意味を持つと思われるのが、先に述べた「大川端」時代」という随筆である。これは、小山内が関東大震災後、大阪に移り住んでいた頃にプラトン社の雑誌『女性』に書いたものである。小山内自身が巢鴨の至誠殿や大本教の信仰について言及しているという点で珍しいものであるため、長くなるが引用したい。

私の生活は愈めちゃめちゃになつた。「大川端」の生活などは、まだまだその中で、最も高尚な部分だった。吉原、千住、洲崎、品川、浜町、向島一所の名を挙げるのさへ恥づかしい位である。神を見棄て、人道を無視して、さうした頹廢した生活に身を漬しながらも、私はやはり神を求めてゐたのである。人間を探してゐたのである……私はその時分、明治座の橋の袂で友達になつた乞食の子をいまだに忘れることが出来ない。(拙作「乞食」参照) 私は毎晩のやうに遊びに飽きると、きっと女達を連れて、その乞食の子を訪ねた。私は女達の前で、見えも外聞もなしにその汚ない臭い乞食の子を抱いた。乞食の子の一群の先頭に立つて、月下の大川端を歩いた時は、大学時代に夢想した孤児院の院長にでもなつたやうな気がして嬉しかった。(略) 矛盾した生活一確にそれは矛盾した生活だった。併し、その矛盾一醜い矛盾一が自分にとってはネセシチイだった。いまだにさうである。私の魂は今でも、この二つのものの間を、ふらふら往つたり来たりしてゐる。ドン・ファンか。アシジの聖フランシスカ。果して、どっちにあるのだらう一神は一人間は一私が至誠殿に通つたのも、大本教信者として扱はれたのも、みんな同じ理由からである。いつか、賀川豊彦氏に会つた時、氏は私に向つて、君のいろんな宗教へ行くのは、あれは道楽かと言はれた。私はその一言で、賀川氏と自分とは何の干りもないといふことが分かつた一余りに省察のない、余りに冷やかな詞である。その場は笑つて済ましたが、私の心は今でも口惜し泣きに泣いてゐる……四十にして惑わずと言ふが、私は四十四になつて、まだ迷つてゐる。恥づかしいが、為方がない。嘘つきの羊飼になるよりも、正直な「迷へる羊」になる方が、自分では好いと思つてゐるのだ。⁵

ここで語られる「聖」と「俗」のあいだの「矛盾」は、小山内を生涯悩ませたものであったと思われるが、その「矛盾」が彼にとっては「ネセシチイ」、つまり、必要なものであったのである。しかし、小山内の死後、この側面は新劇運動の不遇時代の逃げ場として捉えられ、彼の「弱さ」を体現するものとして語られてきた。

2. 小山内の宗教信仰はいかに語られてきたか

小山内の宗教信仰に対しては、彼と同世代で、当人も一時キリスト教に入ったことのある正宗白鳥からは、次のように共感を持って捉えられていたようである。

一時キリスト教を信仰したばかりでなく、大本教に凝ったり巢鴨の何かに熱中したりしたのも、西洋渡来の近代人の悩みを翻訳的に身を感じた結果なのだ。私は一時キリスト教を信仰して、何時となしにそれを離れたのだが、何か神秘的なものに帰依して心の安きを得んとする人には、多少の同感をいつももってゐる。神秘的なものを信仰するのは甚だ旧弊らしいのであるが、私はそこに近代人らしい心の動きを見んとするのである。彼は自分で云ってゐる通りの背信者であり、一生一つの信仰に徹し得ないで移り気であるが、しかし、誠意をもって何かを求めんとしてゐるだけは、私は認めてゐて、傍観的に彼に好意を寄せてゐたのである。⁶

しかし、小山内が晩年携わった築地小劇場の弟子筋の者たちからは、このような側面は彼の「弱さ」として語られ、閑却されてきたと言える。まず、堀川寛一は、「何時までもお坊ちゃんで純粋だった小山内にとって、嘘の多い世の中は住みにくかったらう。気の弱い彼はその都度何かしら宗教に頼った。そしてその宗教にさへ救はれなかった。」⁷と、そして久保栄は、「聡明な小山内がこうして邪教に凝ったのは、初恋の経験が暗示するように、母系の遺伝素質をおそれる一種の異常恐怖からだらう」⁸と書いている。

また、松本克平に至っては、

一高時代に内村鑑三の門に入ってキリスト教徒になった青年小山内薫は、不惑の年齢に近づくに従って、踊る神様である巢鴨の至誠殿に熱中し、さらに大本教に凝っていった。キリスト教から邪教といわれる新興宗教に移っていったのである。これは知識人小山内の盲点といわれる面であり、人間的に弱い一面とされている。また演劇近代化のために闘った彼自身の最も矛盾した側面ともいえる。(略) 社会主義には不感症のままその後、土曜劇場、新劇場、築地小劇場を通じて「演劇の実験室」というコースを固持し、昭和に入ってもプロレタリア演劇を理解せず、新劇の思想性と大衆性に対立敗退するに到った要因であるというのは私の小山内観である。⁹

とまで書いている。その書名からわかる通り「社会主義演劇」の立場から小山内の宗教信仰を見れば、それは「新劇の思想性と大衆性に対立敗退するに到った要因」なのである。そもそも、小山内の生きていた頃より、心霊主義とマルキシズムが相容れないものであったことは、森作太郎の『心霊研究と新宗教』にある「日本人の宗教心は日に日に喪失し、

国体に対する観念と道徳に対する信念とが消亡しつつ、マルキシズムの如き有害なる唯物思想自我主義が跋扈するのである。」¹⁰などといった記述からもわかるが、このことに関しては笹山敬輔が以下のように端的に指摘している。

先行研究や評伝の中で、小山内が大本教に入信していたことは、人生の中の一つのエピソードとして語られるだけであった。ましてや、小山内の演劇と関連付けて論じられたことはない。そして、そのエピソードが語られるときは、いつも批判すべきこととして言及された。久保栄は、大本教に入信した理由を小山内の「病理学的な傾向」に求めており、また、松本克平は『日本社会主義演劇史』の中で「小山内薫と大本教」という一章を設けているのだが、入信したことは人間的弱さに原因があり、「演劇近代化のために闘った彼自身の最も矛盾した側面」だと評している。小山内の大本教信仰については、いつも「弱さ」や「矛盾」という言葉で語られるのである。特に久保や松本が辛辣に批判しているのは、彼らがプロレタリア演劇を実践してきた人物であり、「唯物論」の立場からは宗教との関わりを認めるわけにはいかなかったのだろう。¹¹

笹山が指摘するように、これまで小山内の宗教信仰はエピソードとして語られるのみで、演劇と関連付けて論じられたことがなかった。しかし、その状況は小山内の演技論と大本教との関係を明らかにした笹山の研究により大きく進展したと言えよう。本研究では、笹山の論考を引き継ぎ、小山内の宗教信仰や心霊主義的傾向が創作活動といかに関連しているかを考えていきたい。

3. 小山内薫の宗教信仰と大正時代

それでは、具体的な作品に入る前の足掛かりに、本稿では小山内における宗教信仰や心霊主義について、彼が生きた大正時代の文脈から考えてみたい。まず、大正という時代は、次のように宗教信仰と文学や演劇の関係の深い時代であったと言えよう。¹²

大本教や天理教など神道系の新宗教も、知識人を巻き込んで、大きな勢力に発展してゆく。仏教系では、迫害に耐え、積極的に民衆の困苦と取り組んだ日蓮の人氣が高まった。日蓮を崇拜する田中智学が、檀家制度ではなく、個人の信仰に立つ立正安国会を盛んにした。修養団体もたくさんできた。西田天香が一九〇五年、京都の鹿ヶ谷に托鉢・奉仕・懺悔の共同生活の場として開いた一燈園にも、青年たちが集まった。やがて、親鸞の弟子の恋の苦悩を書いた倉田百三の戯曲『出家とその弟子』（一九一七）、キリスト教徒でセツルメント活動や労働争議にも活躍した賀川豊彦の半生の自伝『死線を越えて』（一九二〇）が、ともにベストセラーとなった。この二作は、昭和初年代でも女性雑誌のアンケートで愛読書の筆頭にあげられている。¹³

巣鴨の至誠殿に帝大出身者が多く通っていたことについては先に述べたが、時に「煩悶青年」などと呼ばれる彼らも、ある種の閉塞感を抱え、その突破口を宗教信仰、とくに新興宗教に見出していったという側面があった。大正時代のインテリ層が宗教に対して、まるで哲学のように接近したことは、上原専祿らが座談会で回想しているが¹⁴、小山内に対し

ても、「新劇の父」の「弱さ」という観点からではなく、この時代に生きた一人として捉え直す必要がある。

また、大正時代の新興宗教や心霊主義を考える際に重要なのが、大本教の幹部であった浅野和三郎の存在である。浅野は、小山内の東京帝国大学英文科の先輩であり、小山内と同じくラフカディオ・ハーンのもとで学んだ人物である。このことから、小山内の大本教への接近において、浅野の存在が大きく関係していると思われる。言い換えれば、浅野の存在は、小山内の宗教信仰を考える上できわめて重要な補助線となるのである。

さて、浅野和三郎とはどのような人物だったのだろうか。彼に対する研究は決して少なくないが、今回は以下のものを紹介したい。

浅野和三郎は東京帝国大学にてラフカディオ・ハーンに学び、ディッケンズの「クリスマスキャロル」や、英文学の神秘主義文学や恐怖・怪奇小説に多大な影響を受けた。日本では古典的な推理小説家としてしかほとんど知られていないコナン・ドイルが、降霊術や神秘主義にはまり込んでいたことでも分かるように（略）、19世紀末期から20世紀当初のヨーロッパ、とくにイギリスは古代のケルト文明再評価や、悪魔術の流行など神秘主義思想の宝庫であった。当時流行した心霊学研究は、ヨーロッパでも近代の行き詰まりの中、前近代思想や古代文明への熱狂的な興味が沸き起こっていたことを表している。浅野和三郎はその出自からもわかるように、王仁三郎以上に近代的な知性の持ち主であった。東京帝国大学英文学科を卒業後は、海軍機関学校の英語教官になるなど、当時としては最高の英語力を身につけた国際派知識人と言ってもよい。しかし、一九一五年（大正4年）三男が原因不明の熱病になり、どんな医者に見せても治らなかったのに、ある女性の霊能者が治して見せたことをきっかけに、本格的に心霊学や神秘主義にのめりこんでゆき、大本教に入信した。これは単なる奇跡伝や知識人の気まぐれではない。浅野は日本の霊性に目覚めたというよりは、当時の西欧の超近代主義としての神秘主義に直接影響を受け、さらにハーンから英語だけではなく、日本古来の文化伝統の重要性をも学んでいた。（略）そして、浅野の讃歌は海軍軍人や知識人が大本教の存在を知り、そこに引き付けられてゆく大きなきっかけとなる。¹⁵

心霊主義の移入、ひいては新興宗教の普及においても、英文学者であった浅野のような存在が知識人に与える影響は小さくなかったであろうが、これは、先に引用した正宗白鳥の「西洋渡来の近代人の悩みを翻訳的に身に感じた結果」という分析とも呼応しているように思われる。心霊主義の受容においては、新興宗教と同時に、怪奇小説との関連も重要であるが、小山内が、エドガー・アラン・ポー、E. T. A. ホフマン、ハンス・ハイント・エーヴェルスなどを好んで読んでいたことも併せて考察する必要がある。¹⁶

また、笹山は小山内がその論考の中で、しばしば「靈魂」や「魂」という言葉を使うことについて、

小山内が大本教を語るとき、繰り返し「靈魂」という言葉が登場する。（略）小山内は本格的に大本教に入信する前から、大本教は「靈魂」に関わる宗教であると考えていたのである。そしてこの理解の仕方は、おそらく先の浅野の「宣伝」などを通して得

られたものだろう。小山内にとって「靈魂」は、非常に重要な言葉であった。そのような事情を踏まえれば、小山内が大本教に関わるようになって以降、彼が演劇についての文章で使用する「靈魂」や「魂」は、立ち止まって考えることが必要だろう。大本教を信仰していた小山内にとって、「靈魂」や「魂」は単なるレトリックではない。そこには、大本教や浅野の心霊主義のニュアンスが込められていたと考えられる。¹⁷

と述べている。笹山は、心霊主義が「オカルト」と結びついていない大正時代において、「心」への興味が心霊主義にいくか、フロイトの心理学にいくかは紙一重であったと述べているが、これまでのことから、大正時代には新興宗教と共に、心霊主義というものが今日では不思議なほどに魅力的な概念として捉えられていたことがわかる。

なお、神山彰は、巢鴨の至誠殿が「踊る宗教」であったことに着目し、表現主義との関わりを指摘している。

興味深いのは、大正期、宗教演劇が多い時期に、表現主義も狭いインテリの世界だけとはいえ隆盛していたことである。この両者は決して無関係ではない。(略)「この時代の日本文学は、極端に主観主義的傾向を帯びていた〔略〕進歩的な文学者たちは〔略〕表現主義的芸術の影響を強く受け、自己の現在に持つ痙攣性を表現しようとあせった。

〔略〕私は昭和二年にソヴェートへ旅行するころまでは、この主観主義的影響から離脱することが出来なかった」と秋田雨雀は言う。秋田は「階級的意識に目ざめる」ことで離脱できたらしいが、「痙攣性」を比喻でなく、文字通り「踊る宗教」を信仰するという身体的経験によって、小山内は生きながらえる。そして、その地点からこそ、「靈魂の芸術」というような小山内の演劇観が生れたのだ。¹⁸

小山内の心霊主義的傾向は、神秘主義や象徴主義を連想させやすいが、神山の指摘するように、この頃盛んであった表現主義との関連からも考察する必要があるだろう。巢鴨の至誠殿に通った山田耕筰や石井漠が当時、「舞踊詩」を提唱したことからもわかるように、身体運動に関心の強い時代であったことを忘れてはならない。

なお、小山内は、大正10年(1921)には『路上の靈魂』という映画を製作し、晩年にあたる大正15年(1926)の戯曲『森有礼』においても、「国家を守るのは断じて刀ではありません。魂であります。」という台詞を書いている。¹⁹これらのことから、やはり彼の心霊主義的傾向は生涯を貫くものであったと考えられるが、小山内の用いる「靈魂」や「魂」の持つ意味については、引き続き考えていかなければならない。

おわりに ―今後の課題―

本稿では、小山内薫の宗教信仰とその時代について、「心霊主義」をキーワードに考察してきた。巢鴨の至誠殿や大本教といった、小山内の新興宗教における信仰に関しては、これまで彼の「弱さ」と考えられてきたが、大正時代における宗教や心霊主義を取り巻く背景から言っても看過できるものではない。

小山内の心霊主義的傾向が創作に結びついた例として考えられるものに、『第一の世界』がある。『第一の世界』は、歌舞伎座焼失から間もない大正10年(1921)12月、帝国劇

場で二代目市川左団次一座によって上演された。左団次の演じた主人公は「第二の世界」の研究をする学者であり、霊能力のある書生を置いているという設定である。前年、松竹キネマ研究所に入った小山内は、映画製作から離れた後も松竹の興行で舞台監督を多く務めており、大正10年11月には、新派で上演された賀川豊彦原作の『死線を越えて』（真山青果脚色・伊井蓉峰主演）の舞台監督も担当している。『死線を越えて』と『第一の世界』は、どちらも雑誌『新演芸』の「芝居合評会」の題材に選ばれていることから、当時の関心が小さくなかったことが伺える上演である。

『死線を越えて』は、キリスト教徒である賀川豊彦の自伝的小説であり、大正期から昭和初期におけるベストセラーであるが、まさにこの上演に携わっていた時期に『第一の世界』は書き上げられたのである。小山内もまた、『第一の世界』は、「自叙伝的」なものであると後に記しているが、興味深いことに、先に引用した「大川端」時代で、小山内は賀川に「君のいろんな宗教へ行くのは、あれは道楽か」と言われ、「口惜し泣きに泣いていることを告白している」のである。

なお、『死線を越えて』は新派で上演された同月に、関西では新国劇やエラン・ヴィタール小劇場でもそれぞれ脚色のうえ上演されている。同じく大正時代に多く読まれた倉田百三の『出家とその弟子』も、この12月の有楽座で舞台協会により再演されるなど、宗教色の濃い作品が多く上演された時期であり、その風潮の一端として小山内の『第一の世界』を位置付けることができると思われる。

今回の考察を踏まえ、小山内薫にとって宗教信仰とは何であったのか、そして、どのようにその創作に反映していたかという課題について引き続き考えていきたい。

※引用にあたって、漢字を新字体に改めた。また、読解の便宜上、空欄を補い、仮名遣いを改めたところがある。

1 山田肇「小山内薫の邪教信仰（上）」『劇作』1948年7月、51-52頁。

2 「文士連集鴨の神様信心」『東京朝日新聞』1916年9月27日。

3 石井敬『舞踊詩人 石井漢』未来社、1994年、115頁。

4 戸板康二『新劇史の人々』角川書店、1953年、105頁。

5 小山内薫「大川端」時代『女性』1924年4月、337-340頁。

6 正宗白鳥「小山内薫を追想す」『人間』1947年8月、35頁。

7 堀川寛一『小山内薫』桃蹊書房、1942年、245頁。

8 久保栄『小山内薫』文芸春秋新社、1947年、112頁。

9 松本克平「小山内薫と大本教」『日本社会主義演劇史—明治大正篇—』筑摩書房、1975年、230頁。

10 森作太郎『心霊研究と新宗教』心霊科学研究会、1927年、138頁。

11 笹山敬輔「何が「心」を演じるか—小山内薫におけるスタニスラフスキーと心霊主義」『演技術の日本近代』森話社、2012年、140頁。

12 近代日本における宗教と演劇の関係については、神山彰「宗教演劇の時代」（『忘れられた演劇』森話社、2014年、130-151頁）に詳しい。

13 鈴木貞美『日本の文化ナショナリズム』平凡社、2005年、168頁。

14 上原専禄、柳田泉、勝本清一郎、猪野謙二「明治から大正へ」『座談会 明治・大正文学史（3）』岩波書店、2000年、182-254頁。初出は『文学』1961年9月。座談会の中で上原は、「大正のインテリと現代のインテリとどちらがうのかという問題があり、その当時のインテリといまのインテリとでは、宗教というものに対する感じ方、あるいは弁護の仕方がちがっているかもしれない。だいたいからいって今日のインテリより大正期のインテリのほうが、宗教に対して共感的、共鳴的な面が多かったのじゃないですか。」（224-225頁）と述べた。

15 三浦小太郎「出口王仁三郎と大本教弾圧」『月刊日本』2012年4月、56-57頁。

16 小山内薫「番町の怪と高輪の怪と」（『中央公論』1923年5月）において、「私は幽霊といふものはあると思つてゐる。怨念といふやうなものもあると信じてゐる。この宇宙は霊界と物界とで成り立ってゐて、その霊界と物界の間には、絶えず交通があるものだ」と確信してゐる。それ故、私は好んで怪談を読む。殊に西洋の優れた詩人の書いた怪談を読む。」（136頁）と書いている。

¹⁷ 笹山、前掲書、144頁。

¹⁸ 神山、前掲書、137－138頁。

¹⁹ 小山内薫「森有礼」『中央公論』1926年7月、9頁。